



新たなシーズンに向けて

事務局長 小林二三男

当館ではバット、ボール、グラブ、スパイク、ユニホーム等の実物やポスター、写真を含めて収蔵している資料は3万点を数えるようになりました。現在も各球団、選手、関係団体の皆様のご協力により順調に資料収集は進んでおります。しかし、その内常時展示しているものは約2千点に過ぎません。特別展や企画展の開催や常設展示の入れ替えで出来るだけたくさんの資料を展示公開して、来館者の皆様に楽しんで頂きたいと思っておりますが、何分限られたスペースですのでなかなかご要望に応えることが出来なしております。

昨年ホームページ上でフォトアーカイブスとしてグラブ・スパイク・ユニホームを各50点ずつ公開しました。アクセス数も順調に伸びて大変喜ばれておりましたので、今回はこの資料にバットとボールを加え、館内でも見ることができるよう新たなシステムを導入しました。検索方法にちょっとした工夫があって、ゲーム感覚で楽しみながら見たいユニホームや用具が見られるようになりました。

球史に残る名選手のコーナーには50インチタッチパネルを設置し、画面上にあるホイールを回しながら見たい項目を選び、大分類・中分類・小分類と進んでいくと50インチの大画面に迫力のある鮮明な画像が現れます。

* 収蔵品紹介システム



①スクリーンセーバー



②大分類画面



③小分類画面

ユニホームは実際に展示してあると1面しか見ることができませんが、ここでは前と後の両面を写しているのので普段は見られない角度から見ることができます。サインボールも大きくはっきり見ることができると、角度を変えて写しているのので隠れたサインを発見することができます。バットは実物より大きくというのは無理ですが、グラブとスパイクは実物よりかなり大きく映し出されるので迫力のある展示となっています。

イベントホールには20インチモニターを設置して、通常のパソコン操作で検索することが出来ますのでゆっくり楽しむことが出来ます。

今後も随時公開資料を増やし充実したフォトアーカイブスを目指してまいります。



見たい用具が見られます



《2007年度の維持会員を募集中!》

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

1. 会員の特典

- (1) 当博物館発行「ニュースレター」(季刊)を送付します。
- (2) 無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
- (3) アメリカのクーパースタウンにある野球博物館にも無料で入館できます。
- (4) 会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
- (5) イベント情報などを優先的にご案内します。
- (6) 博物館で販売している商品が10%引きになります。

*新個人会員には上記の特典のほか、3月に刊行した『野球殿堂 2007』を進呈します。

*新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッチ」を差し上げます。

2. 会員の種類と会費

年会費(4月~翌年3月迄)

法人会員	1口	10万円
個人会員	1口	1万円
ジュニア会員(小・中学生)		2,000円

3. ご入会の方法

①館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。

「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、ご希望の方は博物館までご連絡ください。

②“入会申込書”が届きしだい“維持会費のご請求書”をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ 博物館 業務部 高城・竹内
皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。



会員証(一般)



会員証(ジュニア)

【学校教育との連携・学芸員実習について】

当博物館では、ここ数年、大学学芸員課程の学生の実務実習を受け入れており、学生さんの力を取り入れることで、様々な活動を行っています。実務実習は、夏休み期間中に行う集中型と、インターンシップ型の2本立てで実施しています。

集中型は、夏休み期間中に、図書室周辺で開催する小・中学生向けの体験型展示や自由研究相談デスクなどで、お客様との対話や体験のサポートを行うのが主な業務です。平成18年度は首都圏の10の大学から18名の学生を実習生として受け入れました。一人当たり6日間で、7月20日から9月3日まで、一日平均2.5人の学生にお客様対応にあたっていただき、学生からもお客様からも好評でした。

インターンシップ型は、法政大学学芸員課程と協力して昨年度初めて実施し、学生1名を秋に10日間受け入れました。特に収蔵庫整理や、資料データベース用画像データの作製等にあたっていただきました。集中型がお客様対応であるのに対し、こちらはお客様から見えない部分で、実際に学芸員室の仕事を行ってもらいました。また、同じ内容の業務を、インターンシップ型の学生アルバイトにも担当してもらっています(平成18年度は3名、1日4時間勤務、計67日実施)。現在、当館ホームページの「収蔵品紹介」ページや、館内の「収蔵品紹介システム(1面参照)」で紹介している写真の約半数は、学生さん達に撮影、加工してもらったものです。

平成19年度もこの2本立ての実務実習とインターンシップ型アルバイトの受け入れを行い、学生、来館者、博物館の三者にそれぞれに有意義な形で進めていきたいと考えています。



殿堂入りの人々を語る (15)

小川 拓 (小川 正太郎氏 長男)



1981年殿堂入り
小川 正太郎氏レリーフ

私の父、小川 正太郎が野球殿堂入りしたのは昭和56年(1981)、今から26年前のことになります。野球界の発展に貢献したという特別表彰での野球殿堂入りでしたが、野球殿堂入りされた多くの方がそうであったように、父もまた野球一筋の人生を送りました。

父は明治43年(1910)、和歌山県和歌山市に生まれ、中等学校野球(現高校野球)の名門であった和歌山中学に進学しました。長身と子供の頃から市内を流れる紀ノ川で石投げをして遊んだのが幸いしてか投手として活躍の場を与えられ、在学5年間に8度の全国大会出場を果たしました。大正15年(1926)の夏の大会準決勝戦での8連続奪三振は今も夏の大会記録として残り、翌昭和2年春の大会では優勝して米国遠征のご褒美をいただく幸運に恵まれています。最上級生となった3年春には準優勝と数々の思い出を残して昭和4年、早稲田大学に入学。まだプロ野球の誕生以前で人気絶頂期にあった東京六大学リーグ戦において、宮武 三郎氏、水原 茂氏等の名選手を擁し最強と言われた慶應義塾大学との早慶戦に臨むことになりました。春のリーグ戦は2勝1敗で慶應の優勝、秋は逆に2勝1敗で早稲田が優勝しています。11月に行われた第5回明治神宮体育大会の早慶戦では昭和天皇をお迎えしての天覧試合となりましたが、慶應の打棒大いにふるって父は敗戦投手、その試合のことを尋ねると「あの時はよう打たれたなあ」と和歌山弁で懐かしそうに振り返っていました。

大観衆のなかでの対戦でもっとも試合の敗戦を左右するのは精神的な面と考え、しばしばお寺に籠って座禅を組み、また仏教の経典を読んだりしたとのこと。

野球選手として恵まれた数年間は瞬く間に過ぎて、大学2年の頃から病魔との闘いが始まります。ベンチで注射を打ってもらいながら投球をしたこともあったそうですが、わずか20歳にして選手生活を終えることになりました。家には選手時代の写真は残されていますが、私は両親や周囲の方から話として聞くのみで、父の活躍した様子に接したことは残念ながらまったくありません。

大学卒業後新聞社に入社、その後日本社会人野球協会の設立に参画し、同協会を中心に学生野球、高校野球、軟式野球、準硬式野球等アマチュア野球界全般に携わる日々が続きます、私が物心ついてからの父は日本中を忙しく飛び回り、時にはさまざまな大会での優勝チームとともに海外に遠征しておりましたので、時々しか顔を見ることなく、朝、目が覚めると枕元にお菓子が置いてあったりしたものでした。外国から帰ってきたときなど当時まだ珍しかった海外の写真やお土産に目を輝かせたものです。会席は多かったと思いますがお酒はほとんど飲めず、かわりに無類のたばこ好きでゆったりと椅子にすわり、葉巻やパイプをくゆらせる姿がいまでも目に焼きついています。人生のかなりの部分は病気を背負っての生活でしたが、この頃は比較的落ち着いた状態で元気な姿が印象に残っています。自分が病気で苦労したためか見込みがなかったためか、私に野球を教えることはほとんどありませんでした。家にあっては笑顔でいろいろな話をしましたが、野球の話はそれほど多くはなかったと記憶しています。母は様々な事柄をしたためておくよう勧めておりましたが、父が自分のことについて書いたものは何もありません。今になってみると、もっといろいろなことを聞いておけば良かったと悔いが残ります。

父は晩年の10年間は再び入院生活にもどり、昭和55年70歳で他界しました。健康な人生が送れたらとの思いは絶えず心にあったことでしょう。それでも軟式野球連盟の船津氏をはじめ野球界の多くの方々に支えていただき、最後まで好きな野球とともに歩めたことは父にとってどれほど幸せであったか知れません。その上昭和55年には叙勲を、56年には殿堂入りと身に余る栄誉をいただき家族ともども感謝の気持ちで一杯です。そして病気の父を支え続け、二人三脚でこの道を歩きとおした母も後を追うようにこの世を去りましたが、二人とも素晴らしい人生を歩んだことにきっと満足していることでしょう。



もの
知ってほしいこんな資料(59)

坪田名人製作のグラブ

野球体育博物館では、2007年の野球シーズン開幕を記念して、07年4月7、8日にミズノ株式会社のグラブマイスター、坪田信義氏によるグラブ製作実演を開催しました。



坪田氏は、イチロー選手（シアトル・マリナーズ）や松井秀喜選手（ニューヨーク・ヤンキース）らのグラブを手がけ、1998年には労働省（現厚生労働省）「現代の名工」に選出され、2000年には黄綬褒章を受章しています。



両日とも午前（11：00～12：30）、午後（14：00～15：30）の計4回で、順に小笠原道大、高橋由伸、谷佳知、二岡智宏各選手モデルを作っていました。手のひらに接する内側の革の縫い付けから始まって、内側の革と外側の革をはりつける作業、ヒモ通し、ウェブの取り付け、仕上げの作業など、要所要所で今は何の作業をしているのか解説いただき、お客様の質問にもお答えいただきました。また、作業の一部を見学していた少年に体験してもらうなど、参加した少年には忘れられないイベントとなったと思います。



雑誌に掲載された告知記事を見て見学に来た高校生や中学生は、野球用具の製作という仕事への興味もあって来館したとのことでした。今後も、こうした野球界の最前線で活躍される方々の実演などを、少年ファンにお見せする機会を設けていけたらと思います。

なお、当日製作していただいた小笠原選手モデル（写真の後列左）のグラブを、イベントホール「グラブの科学」コーナーで展示しています。残りの3選手モデルのグラブについては、今後、少年ファン向けのプレゼントとして使用する予定です。

学芸員 関口 貴広





コラム／博覧・博楽 (22)



マリリン・モンローが野球帽改革に一役

大場 宇平 (野球体育博物館 維持会員)

日本のプロ野球は、誕生から73年目を迎えたが、あの女優マリリン・モンローの来日がきっかけで野球帽が改革されていたのを知り、そのつながり、因縁に驚いた。

1954年(昭和29)2月1日、引退していたヤンキースの最強打者ジョー・ディマジオがモンロー夫人を伴ってやってきた。セ・リーグの要請から各球団キャンプ指導で3度目の来日だったが「日本の美しい風景をぜひ妻に見せたいと思い同伴した」(報知新聞)と第一声を放っている。

鈴木セ・リーグ会長、巨人・水原監督らが出迎えたが、ファンはモンロースマイルを一目見ようと大騒ぎ。同月24日に夫妻は仲良く帰国するまで、日本中はモンローパニックに陥った。その時、ディマジオが日本の野球帽の布を、8枚から現在の6枚(六接ぎ)への改革を進言、早速、巨人・水原監督が業者に注文したのが現在に至っていた。

そもそも野球帽の製作に当たっていたのが八木下 秀吉さん。元は貿易商だったが、東京・浅草でハンチングや帽子を作る作業を手伝っていたところ、34年(昭和9)に大日本東京野球倶楽部(現読売巨人軍)から突然「野球用の帽子を作って欲しい」の難題が申し込まれたという。

現在、埼玉・越谷市で2代目を継いでいる邦夫さん(66)=有限会社八木下帽子代表取締役=によると、「父は野球帽など見たことも無く、本や雑誌を見てベースボールを研究したらしい。それでベープ・ルースの写真でも見られるような、ミカンを半分に切った形を8枚布で接ぎ合わせて作り、頭にちょこんと乗っける姿になった」という。

戦災で浅草当時の帽子はほとんど失ったが、92歳で亡くなった秀吉さんのノートを引っ張り出し、その苦勞ぶりを察しながら語る邦夫さん。それ以来、野球界とは切っても切れない間柄となり、プロ野球の父・正力 松太郎さん(元読売新聞社主)に感謝し、今も巨人軍から秀吉さんの葬儀の際にもらった供花の名札が居間に飾ってあるほど。

その秀吉さんが苦勞したのがディマジオの助言を受け入れた水原監督から「6枚(六接ぎ)と同時に布地をカシミアかメッシュで出来ないか」といわれたこと。布地といっても当時フラノが精々で、カシミア、メッシュなどはとても高くて手が出ない。その布地集めに奔走し、帝国ホテルの制服布地までテスト、マークもTとGの組み合わせから、刺繍で現在のYGとした。それもGを膨らませ、Yの耳に特徴をもたせた。

プロ9球団と同時に早大、明大など六大学の帽子も八木下帽子が手がけていたが、今や8枚帽子は、練習用で使用されているぐらいで、ディマジオがもたらした改革は大きかった。モンロー夫人は京都見物などで日本を謳歌している時、本人は香椎球場を始め、広島、甲子園、奈良、明石などを回り、セ6球団を指導。その時「日本人は体が小さくともフォームを覚えたら大リーグのレベルに達する」と現在のメジャー流出を予想していた。

八木下さんの家には二出川 延明審判を始め、島岡 吉郎・明大監督ら殿堂入りしている人々の帽子も遺されている。長嶋 茂雄・巨人軍終身名誉監督の還暦帽子、「3」入りの2個しか作らなかった最後の帽子とか、ファンにはお宝ばかり。「長嶋さんにはいつも5個作り、3個渡した。3の数字にこだわったから」と笑う八木下さん。巨人の帽子を66年間作り続けたことに誇りを持っている。

博物館を訪ねた際、長嶋さんのコーナーに八木下製の帽子とともに73年(昭和48)に仙台のすし屋さんで関根 潤三さんと秘密特訓したときのバットが飾ってある。澁澤 良一元セ・リーグ事務局長とともに私も入ったすし屋さんで、東北遠征で打てない長嶋選手を見かねた関根さんが、店から硬球用バットを借り「誰も上がってこないで」と、二階で振らせたバットだ。翌日の5月17日、盛岡で本塁打を打った。通算444本で東北遠征たった1本の貴重なホームランだった。

お宝ブームでサインにも高値が付く昨今、帽子といい、バットといい何らかの因縁がある。モンロー夫人の「日本に行きたい」のおねだりが無ければ、今の野球帽はどうなっていたらろう。



こんにちは図書室です



今回は、今、話題となっている東京六大学野球連盟の野球部が使用していたグラウンドの変遷についてまとめました。現在は、どの野球部も専用グラウンドを使用していますが、以前には、慶大の調布球場、明大の駒沢グラウンドや東大の尾久球場のように、貸し球場を使用している時代がありました。

大正～昭和初期の雑誌「野球界」にある各野球部の月報を読むと、球場の交通事情や立地などの周辺情報があり、現在の地図と比べられます。野球部の歴史とともに、町の歴史散策はいかがでしょうか。 司書 山根 礼子

東京六大学使用グラウンド

大学名	グラウンド	使用期間	場 所	現 在	備 考
慶應義塾	綱町	1903年(明治36)～1924年(大正13)	三田 綱町	港区三田 綱町グラウンド(慶應義塾中等部が体育の授業などで使用)	明治36年に最初の早慶戦を開催。2003年11月21日に「早慶戦100周年記念碑」の除幕式が行われた。綱町以前は、稲荷山の広場などを使用していた。
	調布	1924年(大正13)～1926年(大正15)	現東急東横線 田園調布駅付近	田園テニス倶楽部あたり	1936年～1989年まで、テニスのメッカ、田園都市コロシウムがあった。
	新田	1926年(大正15)～1941年(昭和16)	現東急多摩川線 武蔵新田駅近く	大田区千鳥2丁目	スタンドは15,000人収容でき、隣には、フットボールグラウンドとトラックフィールドが出来たと当時の雑誌に記載されている。同時期に新田神社の隣に合宿所も移転。合宿新築落成記念の試合を行い、多くの観客が観戦に訪れた。(1926年6月20日)
	日吉	1941年(昭和16)～現在	横浜市港北区日吉 慶應義塾大学日吉グラウンド		同年に合宿所も新田から日吉に移転。
早稲田大学	戸塚(安部球場)	1902年(明治35)～1987年(昭和62)(昭和24年に安部球場と改称)	戸塚	早稲田大学総合学術情報センター	1933年に日本で初めて夜間試合を行った。2004年11月9日に戸塚球場で早慶戦が開催されてから100周年を記念し、記念碑の除幕式が行われた。また、安部磯雄氏と飛田穂洲氏の胸像もある。
	東伏見	1988年(昭和63)～現在	東京都西東京市 東伏見		1988年3月5日の球場開きには、安部球場の土を撒いた。式後、稲門倶楽部対現役の試合が行われ、稲門倶楽部が勝利した。
立教大学	築地	1909年(明治42)～1913年(大正2)	築地立教中学グラウンド	聖路加国際病院あたり	三一教会と神学校に囲まれた中庭みtainところだった。
	池袋	1913年(大正7)～1925年(大正14)	立教大学内	豊島区池袋 立教大学内	バックネットの裏側には10段ほどの簡単なスタンドも取り付けられた。
	東長崎	1925年(大正14)～1966年(昭和41)	現西武池袋線 東長崎駅下車	東京都立千早高校あたり	この球場での最初の試合は10月13日の対明大戦。この試合で湯浅投手(明大)がノーヒットノーランを達成した。
	志木	1966年(昭和41)～現在	埼玉県新座市		センター120m、左右両翼100mの広さがある。
明治大学	柏木	1910年(明治43)～1916年(大正5)	柏木駅(東中野駅)の近く	明治大学附属 中野中学・高校あたり	木造1,500人収容のスタンドを造り、スタンド竣工記念試合を行った。
	駒沢	1916年(大正5)～1930年(昭和5)	現田園都市線 三軒茶屋駅下車	世田谷区野沢1丁目	その後、明治薬学専門学校駒沢校舎になる。スタンドは芝生で青く緑にいろどられていた。
	和泉	1930年(昭和5)～1960年(昭和35)	杉並区和泉	杉並区和泉 明治大学和泉校舎の隣	8月31日に駿台倶楽部と記者団で球場開き試合を行った。
	調布	1960年(昭和35)～2006年(平成18)	調布市佐須町	調布市深大寺南町	グラウンドは第1、第2面のほか雨天練習場もあり、合宿所などを含め、総面積は約27,214㎡メートルととても広がった。
	府中	2006年(平成18)～現在	府中市若松町		通称は「明治大学 内海・島岡ボールパーク」。約75,000㎡の敷地にはグラウンドの他に合宿所などがある。第一球場の裏には、内海弘蔵氏と島岡吉郎氏の銅像がある。
法政大学	柏木	1915年(大正4)～1916年(大正5)	新宿区柏木	JR大久保駅付近	田園風景の中のグラウンドであった。
	神田橋	1917年(大正6)～1918年(大正7)	神田橋(神田橋内騎兵連隊跡)	気象庁あたり	騎兵隊の跡地が5,000坪の新運動場となった。右翼は狭いが、都心にあったので便利だった。
	中野	1919年(大正8)～1939年(昭和14)	現西武新宿線 新井薬師駅あたり	中野区新井薬師駅あたり	右翼左翼均等のグラウンド。畑の中に立っていた。
	川崎木月(法政大学川崎総合グラウンド)	1939年(昭和14)～現在	川崎市木月		総合グラウンドで、野球場の他に、陸上競技場、サッカー場、ホッケー場、ハンドボール場などがある。
東京大学	尾久	1923年(大正12)～1925年(大正14)	尾久遊園地停留所前	荒川区西尾久町	1925年(大正14)にはアメリカの女子野球チームが試合を行った。
	農学部(現駒場キャンパス)	1926年(大正15)～1935年(昭和10)	駒場農学部(現駒場キャンパス)の南西。	東京大学駒場キャンパス	すり鉢型の球場でスタンドは木製のものがあった。
	川口	1935年(昭和10)～1937年(昭和12)	川口荒川畔	荒川河川敷	一高が駒場に移転することになったため、本郷グラウンドができるまでの一時的なものであった。
	東大	1937年(昭和12)～現在	本郷 東京大学農学部キャンパス、最北端		竣工当事、バックネット裏には屋根があり、高さは15段ほどで一番下が記者席になっていた。外野スタンドは芝生になっていた。



「野球殿堂2007」刊行しました!!

日本野球の発展に大きく貢献した方々の功績を永久に讃える「野球殿堂」。1959年の創設から2007年までに殿堂入りした161名の方々の足跡を綴った1冊「野球殿堂2007」を刊行いたしました。2002年に「人で振り返る野球ハンドブック」を刊行して博物館案内と殿堂入りした方々を紹介しましたが、以来5年が経過して新たに17名が殿堂入りを果たされておりますので、今回は野球殿堂にスポットを当ててみました。

日本とアメリカの野球殿堂についてのコラムも所々に掲載しており、興味のある一冊に仕上がりました。



(本書の内容)

- ・ 1959～2007年までに殿堂入りされた161名の球歴・プロフィール
- ・ 鎮魂の碑
- ・ 戦没野球人
- ・ 野球殿堂コラム
- ・ 表彰委員会規程・変遷

編集 (財)野球体育博物館

発行 ベースボール・マガジン社

定価 2,100円(税込)

*博物館の入口受付で販売しています。

*郵送も致します。(郵送希望の方は、2,500円〔本代 2,100円+梱包・送料 400円〕を現金書留で当博物館までお送り下さい。)

博物館からのお知らせ

【評議員の交代】

新任 依田 龍也氏
(株)西武ライオンズ常務取締役管理本部長 連盟担当)

退任 黒岩 彰氏

「オフィシャル・ベースボール・ガイド 2007」販売中!

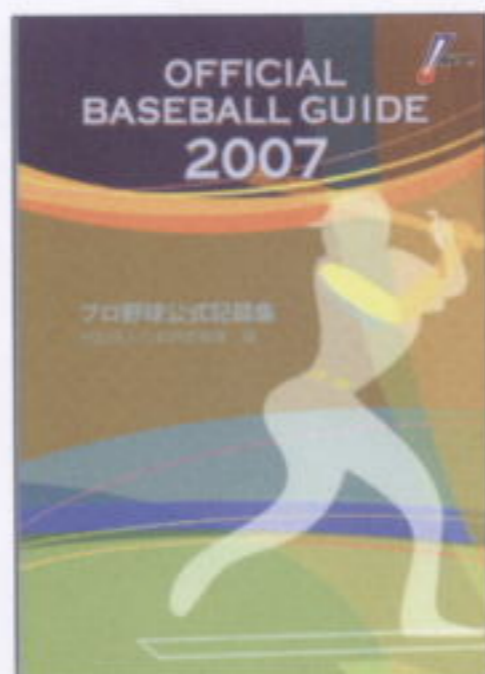
1963年から毎年発行されているプロ野球公式記録集です。両リーグの全選手投・打撃成績・全投手成績、日本シリーズ・オールスターゲームの記録集、イースタン・ウエスタンリーグの成績、セ・パ両リーグの記録集などプロ野球の1年の出来事がわかる一冊です。

編集 (社)日本野球機構編

発行 共同通信社

定価 2,900円(税込)

*博物館の入口受付で販売しています。



●博物館のご案内

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日～9月30日 AM10時～PM6時
10月1日～2月末日 AM10時～PM5時
(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大人 500円(300円) ()は
小・中学生 200円(150円) 20名以上の団体
65歳以上 300円

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
年末・年始(12月29日～1月1日)

〈5月・6月・7月の休館日〉

5月 7日・14日・21日

6月 4日・18日・25日

7月 2日・9日

*7月10日から9月9日まで無休です。

Newsletter Vol.17 / No.1

2007年4月25日発行

編集・発行 財団法人 野球体育博物館

〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369

<http://www.baseball-museum.or.jp/>

定価 100円

●編集後記 新しいシーズンが始まりました。館内にはバットやグラブなどの収蔵品を写真で紹介する「収蔵品紹介システム」が新しく加わり、収蔵庫にあるものもご覧いただけるようになりました。また、図書室にも今年のファンブックなどが続々と届いておりますので、ぜひご利用下さい。



リレー随筆(28)

渡辺 融 (特別表彰委員会委員)

ベースボールが野球と呼ばれる以前の草分けの時代、東京の野球界で「獍猛」と渾名された選手がいた。その名は町田 一平、駒場農学校の学生で、全都の名手が集う溜池倶楽部の中心選手だった。ミットもマスクもない当時、素面素手で打者に密着して捕手を務め、ファウルを左目に当ててダウン。しかし、それでもプレーをやめず、大本塁打を打って塁を駆けめぐると、という豪傑ぶりを発揮したのでこの名を得た。

肩幅が広くがっちりした体格で、投手としても剛球に加えて、カーブを体得しており、球界の覇者一高の『野球部史』にも恐るべき強敵として名を遺している。

出身は鹿児島、桜島の山麓の垂水(現垂水市)。生家は、藩主の一家門垂水島津家の筆頭家老の家。明治3(1870)年生。農学校卒業後は帰郷し、専門を生かして果実(温州蜜柑、びわ)や煙草栽培に先鞭を付け、農会長、郡会議長を務めた。また、鉄道・電気・郵船会社を設立・経営するなど、地域、とくに大隅地方の発展に尽瘁した。

昭和20(1945)年1月没。功績を顕彰して垂水港に胸像が建立されている。野球について語ることは少なかったが、晩年、地元新聞社の座談会で「鹿児島は昔からハマ打ちが盛んな所、お陰で打撃は最初から自信があった」と語ったという。

この「ハマ打ち」は一般には「ハマ投げ」と呼ばれ、鹿児島藩時代には武家の子弟の武芸鍛錬を兼ねた遊戯として行われていた。暫く途絶えていたが、昭和38年に保存会が出来て復活され、現在では鹿屋体育大学がこれに協力して保存と普及・研究に努めている。

先年、現地の友人の誘いでこれを見る機会を得た。競技法は概ね次の通りである。

細長い矩形の地域で、真ん中の境界線を挟んで左右(仮に紅白とする)5人ずつが縦一列に約5m間隔で並んで相対する。まず、白の先頭の者が紅組に向ってハマと呼ばれる木製の円盤(直径6cm、厚さ2.5cm)を転がす。紅組はポット(木刀の薩摩訛)と呼ばれる長さ1mほどの槌形の木製スティックでこれを打ち返す。打ち返す前にハマが自陣内で止まって倒れた場合、また誰も打ち返せず、自陣を貫通された場合には失点となる。打ち返したハマを相手が打ち損なったら相手の失点となる。一定時間内の得失点で勝敗を決める。

打たれたハマが空中に飛ぶ場合もあって、その行き来は目まぐるしい。確かに、敏捷性・勇気・動体視力の訓練に適し、野球の基礎練習としては絶好である。

試合進行の中では、ハマが立ったままの状態(これはインプレーである)のが最高のチャンスである。筆者が見た試合の中で、唯一回だけこのようなチャンスがあった。攻撃側の子供達は大喜びで駆け寄る。なかに一際目立って体格が良いガキ大将風の子がいた。群がる仲間を制止して、自ら長棍一閃、ハマは並み居る相手方の頭上遙か、エンドラインを奥深々と破って1点獲得。「獍猛町田」の豪打を彷彿とさせるシーンだった。あの快打を味わった子は一生「ハマ」が忘れられないだろう。

こんなわけで、不毛と見える日本の前近代の球戯にもベースボール受容の素地があったことを発見し大変愉快に感じた次第である。